



第131号

発行

熊本市中央区黒髪2丁目22番1号
熊本県立済々黈高等学校
同心会広報委員会

王綱領

心倫 重座 山崎 大義
磨知 振文 進文 明

同心会ホームページ

http://seiseiko.ed.jp

済々黈のホームページにある「済々黈同心会」のバナーをクリックしてください。

同心会総会

平成28年度
5/19 (木)

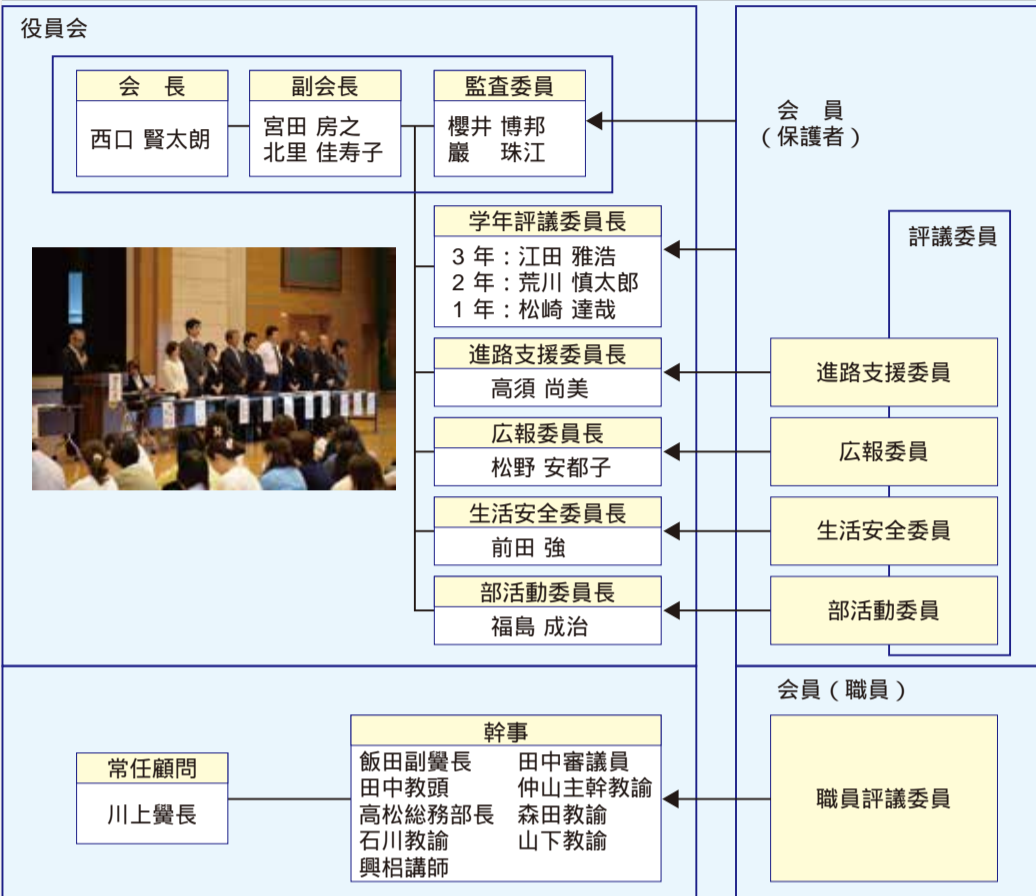
同心会総会、学級懇談会及び授業参観が行われ、多くの保護者の出席があった。野口会長より震災時に避難所となった本豊体育館における生徒・OBの活躍ぶりの紹介があり、議長挨拶でも「同心会」の名称の由来の紹介後、震災による休校措置に対する今後の学校としての対応の説明に続き、本豊から熊本復興の狼煙をあげていきたいという話がなされた。引き続き、事業報告や新役員紹介、予算決議などがあり、閉会後は、場所を各HRに移し学級懇談会が行われ、担任・保護者間の活発な情報交換が行われた。

総会に先立って午前実施された授業参観では、多くの保護者が見守る中、集中して授業に臨む生徒の姿が印象的だった。



総会に先立ち行われた授業参観

同心会組織図



保護者の皆様へ

同心会会長 西口賢太郎



この度の熊本地震で被災された皆様に、心からお見舞いを申し上げます。

済々黈は大きな被害もなく、本豊後には体育館が避難所となりました。そこでは熊大に進学した本豊OBを含む学生ボランティアのグループが結成され、献身的な活動を行っていたと聞いています。また、多くの済々黈生たちもそれぞれが暮らす地域でボランティア活動を行っていたそうです。

済々黈を創設された佐々友房先生は「我が黈は知識を授けるのが目的ではない。その知識を活用する底力を身につけるのが眼目である」という言葉を残されています。未曾有の自然災害を目の当たりにした時、誰もが呆然と立ち尽くしてしまっています。しかし、本豊で学ぶ生徒たちは、決して立ち止まる事無く、目の前の課題に果敢に取り組んでいたのだと知りました。佐々先生の言葉を正に体現してくれた生徒たち。百三十数年という伝統が脈々と受け継がれていることを思う時、済々黈で学んでいる子の親として本当に嬉しく、心強く思いました。

しかしながら、今回の震災は恩賜記念大運動会の中止など学黈行事に少なからず影響があり、子どもたちは貴重な時間を失っています。それを少しでも取り戻せるように、子どもたちが充実した高校生活を送れるよう、同心会では物心両面にわたる環境づくり、支援をしていきたいと考えています。

済々黈では、いわゆるPTAを「同心会」と呼んでいます。黈歌に「同心の友集まりて 道を講ずる一茅舎」とあります。「一茅舎」こそ、済々黈の前進であり、佐々先生が創られた私塾「同心学舎」のことです。この同心学舎には、熊本の、日本の行く末を論じた若者達の姿があったのではないのでしょうか。意見百出あっても、目的は一つ。同心とはそのようなことかと、私は解釈しております。全ては子ども達の為に、皆様のご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。



復興の歩みにむけて

黈長 川上修治

去る四月十四日に端を発する未曾有の熊本地震で多くの方々が尊い命を亡くされ、多くの県民の方々が避難所生活を余儀なくされました。心から哀悼の意を表しますとともに、お見舞い申し上げます。

さて、平成二十八年度のスタートは予想だにできなかった熊本地震からはじまりました。四月十四日から五月九日まで臨時休校。五月十日に学校再開を果たしたばかりです。五月八日予定の第百三十三回恩賜記念大運動会は、断腸の思いで中止。高校総体も総合開会式は中止、各競技も熊本市を除く各地域での分散開催。総文祭は囲碁将棋、百人一首を除く全競技ならびに総合開会式が中止。県総文祭も県代表のキヤッチコピーとして本豊総務委員長恒松雅さんの「集合！文化のパスルピース」が最優秀賞に採用されたところでした。

スタートは遅れましたが、再開から約二ヶ月あまり経ち、学校にも生徒の明るい笑顔や元気な声に戻りつつあり、ようやく少しずつ日常をとりもどしているところです。我々は、このような状況下だからこそ済々黈がひとつになり、「チーム済々黈」、「チームくまもと」で乗り切ることが大切だと思います。

本豊生徒会の呼びかけで他校の生徒会約百二十名とともに絆をむすび熊本地震募金活動を展開してくれました。

また、総文祭に於いても、元氣と笑顔を熊本全体に発信してくれました。地震については受け入れられない悲しみや辛さを時間をかけて克服していきながら、復興への歩みを続けていきます。物事がいつまでもそのままでいいことはないことは、人類の歴史が語ってくれています。数年後、数十年後、「天地万象皆我が師」と復興の歩みを振り返りつつ、黈歌を声高らかに謳える日が必ず来ると信じています。

孔明柏

Koumeihaku

二年前の入学説明会にて先生からこのような言葉をいただいた。「今までお子様を手塩にかけ育ててこられたことでしょう。でもこれからは親御様が子離れの準備を進めてください。初めて高校生の親になった私にとって、心揺さぶられる一言であった。そうが、高校卒業する時には十八歳、大人の階段を上っているのだ。まさか親が教えて頂くとはいえなかつた。親が子離れできないと、子も親離れは出来ないだろう。大正十二年の関東大震災で帝都は破壊された。その復興の先頭に立ち短期間のうちに、より良き都市に東京を作り変えた男がいる。後藤新平。彼の言葉に「自治三訣」というものがある。「ひとのお世話にならぬよう、ひとのお世話をするよう、そしてむくいを求めぬよう」。個人を治め、地域を治め、国を治めるための行動原則として有効な言葉だ。熊本で大地震が起きた。住み家が被害を受け、学校は避難所となり、熊本の人たちは大いなる困難に襲われた。直後、我が黈の生徒たちはどう動いたか？東北大地震を見聞したのもあったのだからと思うが、大半の生徒が率先して人助けに参加した。すくく頼もしく思えた。娘に聞けば「授業はないし暇だったから」とうそぶくが、いやいやとどうして、しっかり「後藤新平の「自治の基本」の一部を身につけていたのではないか。演劇部である娘は会場が壊れ総合文化祭が中止となりかなり落ち込んでいたが、親からみればこの地震をきっかけに大きく成長していることの方が大きい。これから熊本の復興には、(親離れできる「自治する」)今の青少年らの活躍によるところがあるだろう。うかうかしては行かない。娘の高校生生活もあとわずか。将来我が子が良き市民となり人を助ける。そのような大人になつてもらうために「子離れの準備」をしていきたい。

第三学年評議員 江田雅浩

